

速報レポート 8th長崎QDG実行委員会

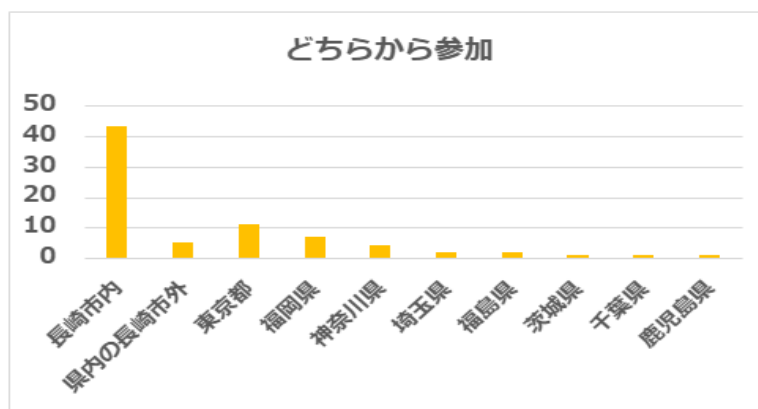
はじめに

2025年2月7日(金)、DEJIMAメッセ長崎（長崎県長崎市）にて、8th長崎QDGを開催いたしました。

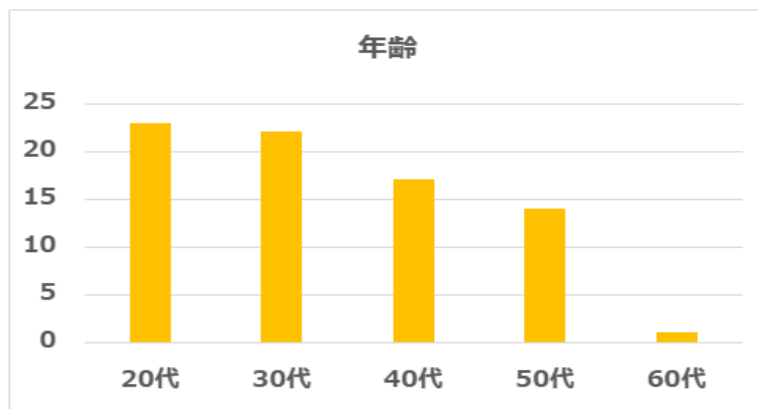
開催当日、折からの寒波の影響で降雪もあった長崎市でしたが、交通の乱れもなく無事に開催することができました。参加者は全体で85名となり、過去開催から最大の人数での開催となりました。ご支援くださったスポンサーも総数11社となり、こちらも過去最大となりました。

今回のテーマは「より高品質なソフトウェア開発を。」といたしました。ソフトウェア開発に関心がある方が集う当イベントですが、ソフトウェアテスト・品質に対しての強い関心を感じることができました。

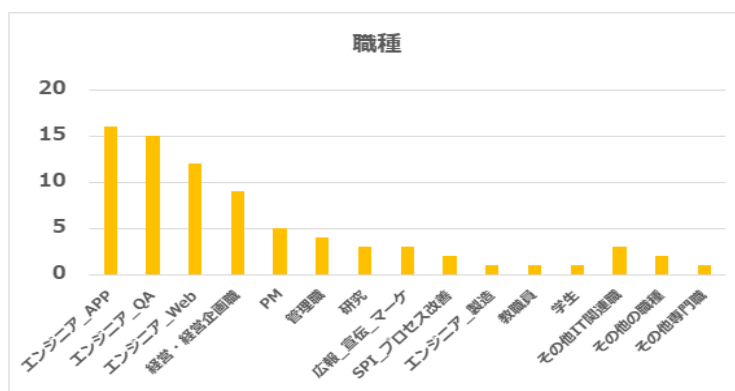
■参加者情報



年齢は幅広く、若い方にも興味を持っていただいております。若い方々には技術や会社の成長を担っていただけるきっかけになることを期待しています。

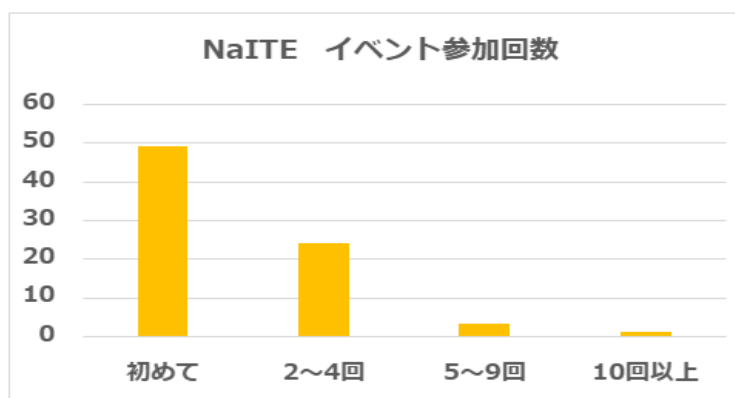


参加地域については、半分以上が長崎県内からご出席いただきました。回を重ねるごとに地域に根付いたイベントに成長しています。また、半分は県外からのご参加で、地域にとどまらない幅広い交流の場となっています。



職種については、アプリケーションエンジニア、QAエンジニア、Web開発エンジニアが多数を占めています。

しかしながら、経営層・経営企画層からも多数のご参加があり、ビジネスレベルでの品質意識が高いことがうかがえます。



長崎QDGを含むNaITEが主催するイベントの参加回数は、初参加いただいた方が多い結果となりました。これまでリーチできていなかった方々が多数参加いただいたと思われます。

一方で、リピート参加していただいた方も多くいらっしゃいました。

■参加者の声

現地に参加いただいた方の声をいくつか掲載いたします。

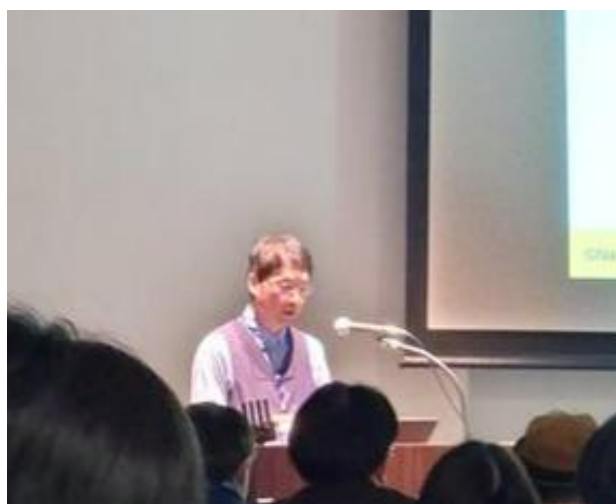
- ・ソフトウェア開発の経験が浅くとも理解できるような内容が多かった。
- ・現地のみだからこそ聞くことができ、発表の内容にも質疑応答にも熱量があった。
- ・これからの取り組みに対してのモチベーションが得られた。
- ・QAやソフトウェアテストに関する歴史的な知見を得られるいい機会だった。
- ・これまで取り組めていない自分たちの開発プロセスを見直すきっかけになった。

■開催会場の様子



セッションレポート

【オープニングセッション】



実行委員長の能見より開会のあいさつをいたしました。

- ・約半数の方が長崎市内からの参加で地域に根付いてきたこと。
- ・20代30代の若手の参加が多いことがアナウンスされました。
- ・今年は長崎IT技術者会が発足から10年目になること

などもアナウンスがあり、スポンサー各社様、ご参加いただいている皆様のおかげで長く続いていること、今回も盛大に開催できることについてお礼を述べました。

【スペシャルセッション：末村 拓也 氏（AUTIFY, INC.）】

「事業継続を支える自動テストの考え方」

Autifyの末村氏から、ビジネスの拡大とニーズの変化に伴うソフトウェアの複雑化と、複雑化するソフトウェアを支えるための自動テストの取り組みについてご講演いただきました。

自動テストは、ソフトウェアの品質を保つための重要な手段であること、エンジニアが事業の変化に柔軟に対応できるようにするための支援であることが説明されました。

テストを自動化することで、エンジニアが手動で行うテストの負荷を軽減することが可能となり、継続的な品質保証を実現するための手段であることが説明されました。

具体的方法としては、ユースケースや振る舞いに基づいたテスト設計を行うこと、ビジネスの変化や複雑になりすぎたソフトウェアに対しては分割統治やリファクタリングといった方法により複雑さを解消すること、その振る舞いを保障するために自動テストが重要であることが説明されました。



【技術・事例・研究セッション：荻田 蓮 氏（フリー株式会社）】

「テストアーキテクチャ設計で実現する高品質で高スピードな開発の実践」



システムのテストの重要性と課題に焦点が当てられ、論理的機能構造による分類と、テストケースの重篤度分類、テストサイズ最適化による効率的なテストスイートの構築についてお話いただきました。取り組みの成果としては、リリース頻度が改善され短縮できたこと、デグレの流出を防ぐことができたことによる品質向上があり、重篤度に基づいたテストケースの選定により、クリティカルな問題に迅速に対応できるようになったことなどを説明いただきました。

【スペシャルセッション：水野 昇幸 氏（システムエンジニアリング）】

「ビジネスと現場活動をつなぐソフトウェアエンジニアリング ～とあるスタートアッププロダクトの成長記録より～」

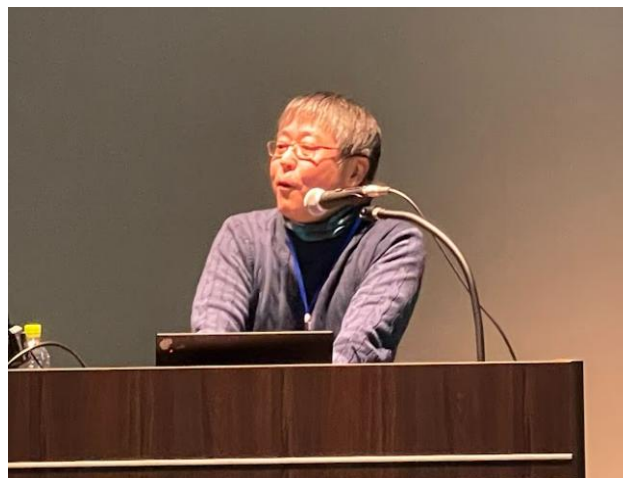
スタートアッププロダクト開発のゼロイチから市場投入後の成長にかけてのプロセスの見直し、品質への取り組みについてご説明いただきました。

ゼロイチフェーズと、市場投入後にユーザが扱ってからは品質への取り組みが違い、まずユーザがつくつかつかないかの状況ではビジネス的な判断も難しいため、高速にプロトタイプを作り市場に投入するという取り組み、市場投入とユーザの拡大が見え始めると、品質に対して厳しくプロセスをコントロールすることの重要性をお話いただきました。

不具合が多発する状況下では、テストをやみくもに実施することはせず、納得のいく必要なテストを考えて設計することが効果的であること、ビジネスとして最小限な状況に導くことなどをお話ししていただきました。

ビジネス状況の変化により、個別ユーザへの対応などを行いだすと、開発現場のインテグレーションが売り上げの限界を決めることなども説明していただき、ビジネスをスケールする際のプロセスや対応について解説していただきました。

後半では正しいES（従業員満足度）に取り組まなければ、必ずしもCS（顧客満足度）につながらないこと、問題解決のプロセスが重要であることをお話ししていただきました。



スポンサーセッション

1. 株式会社NDKCOM 水田 真之介 氏

1966年創業で長崎市内で長くシステム開発を行っており、「ITの力で長崎から元気に」をパーパスに地域貢献されている企業様とのこと。

品質向上を目的とし社内で「ENQiプロジェクト」を実施している。JSTQBの有資格者を着実に増やすことでJSTQB Platinum Partnerの認定を受けたこと、実践的なテスト設計ができる技術者を増やすためにASTERのテスト設計コンテストに挑戦していること、コンテストではU30に2チーム出場し2チームとも決勝に進出し内1チームは準優勝を獲得したことをお話ししていただきました。



2. 株式会社西海クリエイティブカンパニー 星野 美緒 氏

人が減っても大丈夫な社会を作るために、長崎県西海市で創業され幅広く事業を行っていらっしゃいます。様々なAIを開発されており、自治体へのAI職員などを提供されています。社内の開発にAIを活用する際は人の目では見落としがちな部分にAIを利用されており、開発者はロジカルな部分に集中することで業務の効率化を図っているそうです。

まだAIでは不正確な部分が存在するため、最終的には人による成果物の確認が必要ということが強調されていました。



3. シルバー「株式会社ベリサーブ 大西 建児 氏」

会社の事業のご紹介と、大西様が編集長として携わられているオウンドメディア「Hello, Quality World! (HQW!)」をご紹介いただきました。オープニングセッションの誤植の指摘を交えつつ、HQWでインタビューに答えていただいた方が今回のQDGにも複数名参加されていることなどご紹介いただきました。



技術・事例・研究セッション：武次 恭平 氏（京セラコミュニケーションシステム株式会社）
「社内有識者観点をを用いたソースコードレビュー自動化の取り組み」



本セッションではAIを活用したソースコードレビューの自動化への取り組みについてご説明いただきました。レビューが多忙となりやすいこと、レビューの指摘観点もレビューにより揺らぎがあることなどの内部課題があり、解決のためにコードレビューの自動化に取り組み始めたところのご説明がありました。

ソースコードの品質を測るためサイクロマチック複雑度などの指標が利用されており、それらの指標によりソースコードの可読性や保守性の見える化に取り組まれているそうです。

ただ開発者に数値を提示しただけではどのように修正すればいいのかが不明なため、AIを利用してソースコードの改善提案をセットで行われており、開発者が修正を行うと、修正に対して感謝するメッセージを表示するなど、開発者のモチベーションにも寄与する活動をされているといった説明をしていただきました。

ライトニングトークス（3件）

1. テスト技術者になるための第1歩～JSTQB FL受験を通した体感～：高野 茂倫 氏（三菱電機株式会社）

ハードの分野からソフトの分野に異動したことで、ソフトウェアに関しての知識の習得が必要となり、社内で行われるソフトウェア技術者育成の活動に参加されているとお話をされました。また、知識の習得のためにJSTQB-FLの学習のテクニックや苦労された点や解決に取り組んだ点についてLTされました。



2. うまくいったと思ったレビュー活動に対して仲間から不満を言われた時の話：村穂 紀成 氏（ユニバ株式会社）

開発プロジェクトのリリース遅延が続いていた問題に対応するため、レビュー活動の見直しを実行した経緯が発表されました。シフトレフトの活動に取り組み、メンバー間で仕様のレビューを行うようにすることで、徐々に改善につながった事例を発表いただきました。仕様のレビューに注力する中で上流のユーザの要件について手薄になっているのではというメンバー間の議論も起こり、事例マッピングを利用してより活発にユーザの方を向けるようになったというお話をいただきました。



3. 生成AIで変える問い合わせの未来 ～グローバル化を添えて～：tosite氏（株式会社マネーフォワード）

開発とビジネスをブリッジするガーディアングループという部署で業務される中で、問い合わせ内容が誤って伝えられたり欠落したりすることなどの改善に取り組まれているというお話をいただきました。課題を抱える中で自動化へのアプローチとしてAIを利用することとし、AIにより問い合わせ内容の概要を把握することができるような仕組みができたことを説明いただきました。また、対応を英語でやらないといけないシーンがあるとのことで、その訳にもAIを利用することが効果的であることを説明されました。



スペシャルセッション：湯本 剛 氏（フリー株式会社、株式会社YTTE LAB.）

「ゆもつよがこの30年間自ら経験してきたQA、テストの歴史と未来」

湯本様は豆蔵時代にテスト開発手法である「ゆもつよメソッド」を発明され、日本のソフトウェアテスト技術を向上させるためにJSTQBを展開されています。

今回は過去30年でソフトウェアテストと品質保証（QA）の仕事の必要性や価値がどのように変化してきたのか、これから先どのようなことがQAやソフトウェアテストに必要となるのかをお話いただきました。

ソフトウェアテストの歴史を紐解くと1980年代後半からテストは予防志向の時代となっており、テストは開発ライフサイクルと並行して進められるものとなっていたが、根付いてきたのはここ最近であることが説明されました。

日本では2010年代からスタートアップでQAが開発チームに統合され、QAのロールが人気となってきたのは本当にここ数年であること、日本におけるQAの歴史はQC（品質管理）の延長にある信頼獲得の活動だったものが、昨今ではQAが製品の品質を改善していくための実務的な役割を担う方向へとシフトしていることが説明されました。

未来予測として、QAの活動は総合的な品質のためのQC活動となり、[PQCDSME] 指標が経営指標となること、開発だけでなく全組織を巻き込んだ活動になることを説明していただきました。30年後に向けては歴史に学び同じ過ちを繰り返さないこととして、「日本で生まれたTQCを参考にしたCMMIやアジャイルを日本は逆輸入していること」、「QAが決まったことだけをやればいいというアンチパターンに陥らないこと」に触れ、未来は自分たちで作るものだということを強調されました。



■クロージングトークセッション

「テストエンジニアや品質エンジニアの未来を大いに語ろう」

池田 暁 氏（クオリティアーツ、NPO法人ASTER）大西 建児 氏（株式会社ベリサーブ）

湯本 剛 氏（フリー株式会社、株式会社YTTE LAB.）

このセッションでは

- 30年前にはテストエンジニア、QAエンジニアという言葉もなく、1つのロールとして認識されていなかった
- テストエンジニア、QAエンジニアに求められる変化、教育や育成の重要性
- キャリアの未来を考える



というテーマで意見交換がおこなわれました。

お題1: これまでのテストエンジニアや品質エンジニアに求められてきた変化

- テストエンジニアは自動化スキルが必要である
- テストエンジニアといえどもシステムエンジニアリングを学ぶ必要がある
- 頭の中で探索的テストを行い、エンジニアとしてのベースを身に着ける必要がある

お題2: これからのテストエンジニア、品質エンジニアに求められる変化

- 今の時代はネットで知識が簡単に手に入るため、自ら学ぶことが重要である
- AIの進歩に伴い、人間のテストエンジニアの価値を見極め切磋琢磨することが重要である

お題3: コミュニティが果たす役割と未来

- コミュニティのオフライン活動、対面による泥臭い交流が学びに重要である
- 世代や会社を超えて交流することこそがコミュニティの役割である
- 技術をオープンに語り合いシェアしあうことで、日本全体の技術力が向上する

また、質疑応答ではスペシャルセッションでご登壇いただいた水野様もいち回答者として参戦いただき以下のような意見交換もありました。



- 未経験者が学ぶべきことについて、技術の基礎とプロダクトの仕組みを理解する重要性
 - 日本の技術者の優秀さと誰に向けた品質なのかへの認識を合わせる重要性
-

クロージングセッション

クロージングでは次回への意気込みの表明と記念撮影をいたしました。
スポンサーいただいた各社様、ご登壇ご参加いただいた皆様のおかげで、大盛況のうちに幕を閉じることができました。

では皆様、次回の9th長崎QDGでまたお会いいたしましょう！



以下余白